

吾等民族の覺悟

海軍少將 佐藤鐵太郎

私はこう云ふ御歴々の方の前で御話するのではないと思ひましたが、今更中止する事も出来ず、嗚呼がましき次第とは存じますが、豫定の如く吾等民族の覺悟と題して申上げようと思ひます。私は本會が明治聖徳紀念會といふ名である爲、明治天皇の御事蹟を偲ぶ心をも含んでゐると思ひますので、先づ第一に先帝崩御の當時を追憶せずには居られぬのであります。私は日蓮主義讃仰者の一人でありますので御大患の當時通知のありました儘御平癒の祈禱に出席したのであります。最初には、私も多くの人と共に御經の讀誦を聞きながら心をこめて祈禱しようかと思ひましたが、無論御本尊に對して祈禱すれば差支ないではありませんが、果して如何なる神佛に向つて祈禱するのが最も適當であるかと云ふ考が浮びました。伊勢大廟に向つて祈りを捧げむか、唯單に南無妙法蓮華經と唱んか、それとも目標なしに御祈願申上たるまゝに、歸宅しようかとも考へましたが、私の平生愛讀してゐる維摩經の中に衆生病むが故に菩薩亦病む

と云ふ句のあるのに氣が附きました。陛下は吾々臣民の爲に御大患に罹らせられたので我等臣民の思想

界の混濁風俗の壊敗等が御震襟をなやまし奉つたので御大患に御罹り遊ばされたのである、もしも吾々が悔い改めて立派なる國民とならうと致したなら同經にもある如く衆生の病癒ゆれば菩薩の病亦癒ゆで陛下の御大患も自然御平癒遊ばすであらうこれは畏れながら陛下に御願申上るのが最も適當であると感付きました。かくして、陛下を默想し奉りつゝ心をこめて祈願し奉り、其の後も腹の中で常に祈りましたが、陛下は遂に崩御あらせられましたので、これはどうしても御許しがないのでこんな悲しい事はな
いと思ふて不知不識壽量品を讀誦致したのでありました。陛下は吾々に良薬を御遺しになつて遠方に御旅行遊ばしたのである。吾々は此の良薬を服する事が出来ない爲、陛下の御病は益募られて遂に崩御遊ばされたのである、法華經壽量品の醫師の訓戒が即これである。先帝陛下崩御のとき日本人全體は今更ながら御慕ひ申上たのである、平生は左程にも思はぬ人々もヒシ／＼と御慕しく感じたのである、若し我等臣民が、御遺しになりました是好良薬を服し善良なる心となりますれば壽量品所説の如く先帝は再び歸りますのである如何なる點より拜想し奉つても先帝陛下の御遷御と外申上る事の出来ない御姿を拜する事になるのである然しながら國民の覺醒の要求が彌々益々急なるが爲、皇太后も御崩御遊ばされ、再び諒闇に入つたのであります、この事に就ては非常に尊い訓戒が含まれてゐるので、物質的思想にのみ捉はれてゐる一般の人は左程にも思ひません。諒闇が明けるとすぐもとの氣分に復しすぐ騒ぎ出すと云ふのは、何たるなさげなき國民でありませうか。此の時に際し日本には又大難が起りました。これは

獨逸との戦争であります。斯の如く續々吾々に色々の訓戒が與へらるる以上吾々は大に覺悟せねばならぬ時だと思ひます。我等日本民族は此際大覺醒を起し此大難に對せねばならぬと思ひます。此の頃教育家も幾分眞面目になつて思想界の事に注意する様になりましたが、今に尙之を破壊せんとするものもあります。近頃の或る雜誌で或る牧師が忠孝は日本の固有の文字でない、これにても忠孝の輸入品たる事が明瞭である、忠孝は決して日本國體の精華でないと云ふ亂暴な演説をしたといふ報道に接しました。此の人はランブカステラは日本語でないからランブ、カステラは日本のものでないと唱へるのであります。此不都合なる牧師は、我國體の精華たる忠孝も支那から輸入されたものであるといふて忠孝主義を傷けんとするのであります。吾々國民は一方では陛下の御遣し遊ばされた薬を戴き一日も早く病的思想を直さんと致して居りまするのに、一人でもかゝる事を云ふものがあつては、實に悲むべき次第であります。如何に、思想界の事は、人々の信するに委すべきものなるにもせよ、かゝる不都合なる、しかも御國體に戻る思想は、是非とも取締るの必要あると信するのであります。

次に此度の歐洲戰亂に就て申上様と思ひますが、さて歐洲の戰亂は今後どういふ風になるか一向分りませんが、其の結果の如何に關せず、今後の道德觀、人道觀に非常な變動を來すべきは明白なる次第であります。從來文明を裝い來つた歐洲諸國の道德の本源は、疑もなく人類を基とすべきものである國家とは殆んど沒交渉であると考へ來たのであります。此度の戦争によつて道德は國家を根本にして考

へねばならぬと云ふ事が明かになつたのであります。然しながら如何に國家を根本とする主義が行はるゝに致しましても、極端に走るが如きは危険であります。獨逸新聞の報する所によれば、「獨逸軍隊は敵を苦しめる爲には、如何なる事をなしても差支ない。公有財産のみならず、私有財産と雖どもどし／＼沒收し、老幼男女に係はらず之を凌辱しこれを殘酷に取扱はなければならぬ。もし從來の如く生溫き道徳を用ひたならば、戦争は長引くのである、これこそ罪惡と謂はなければならぬ。出來得るだけ敵國民に大なる苦痛を與へ一日も早く平和を望むやうにせなければならぬ」と云ふ事を書いてをるのを見ました。斯の如きは實に亂暴な言葉であるので、國家根本主義も茲に至ては殆ど手もつけられぬのであります。吾々は此等の點に就ても眞面目に考へねばなりません。乍併、凡そ戦争なるものは根絶し得べきものなりやと云ふに、世の中は丁度水流の様なもので、水源は如何に靜かに且清くありましてもやがて瀧ともなり谷川ともなつて種々に變化するのであります。遂には靜かな流れとなつて海に入るのであります。かくて靜かに海に入りましても、やがてまた、風の爲に波濤を起し、洶湧輪轉究りなき有様となり、更に蒸發して雲となり次で雨となり水源となり瀧となり谷川となる如く循環するので永久に平和の状態を維持することは到底出來ぬのであります。果して然らば、平和が世界の眞相であるか戦争が眞相であるかも分らぬものと思はなければなりません。要するに、戦争は暴風の如きもので永久に止むべきものでないであります。従て、吾人は只これが爲めに大なる損害を受けない様に準備するのみで、如

何に覺悟が大切と云つても風の起らぬように工夫をするのではなく、其の害を避くる爲の努力をするばかりであります。然しながら絶えず戦争のあることは人類の幸福ではありません。吾人は平和を希望するが爲却て軍備を整ふるので、戦はんが爲の軍備ではないのであります。そこで、平和は一方から見れば萬世の後と雖ども不可能なるが如く考らるのであります。一家族の常に平和で假令時々波瀾があるにしても一家族としての平和は立派に存在するが如く、世界の平和もまた此意味に於ては全く不可能ではないのであります。これは如何なる努力を以ても成し遂げなければなりません。然らば如何なる有様となつたならば世界の平和が續く様になるかと云ふに、凡そ世間の争は仲裁者なるものがあつて大事に至らずして止むのであります。しかも兩者に利害の關係なき人が仲裁者となれば争論も速かに止むのであります。喧嘩は兩方の我儘から生ずるものでありますから、兩方に利害關係なく、而も兩方より敬意を拂はれる様な人が其の間に至つて正邪曲直を判斷するならば、喧嘩はすぐ止むのであります。しかるに一家は家長が之を治めて行くもので、家人が勝手に家長を定めるものではありません。弟が如何に實力があつても、兄を凌駕する事は出来ません。この自然の家長なるものがあつて家を支配して行くところに、家族の平和が維持されて行くのであります。自分が一番エライから、此一家の旦那様となるのだといふて、次男三男等が、父兄を差し置いて、争ふ様では、致し方がないのであります。國家に於ても之と同じく、自然に定まつた天來の君主が國家を支配して行けば、國家の大平和は永續するのであります。

世界の平和に就ても此の點に注意しなければなりません。かゝる考はあまりに雄大で而も傲慢な考の様にも見えませんが、私は決してそうでないと思ひます、戦後世界はどうなるか分りませんが、いづれの國に致しましても其の國民が各意見を異にし、多數の爲少數者が犠牲になり互に交替して優者の位地に立つ間は、争亂の止むときはないでありませう。この點から考て見れば、世界萬國が皆天來のしかも萬世一系の御皇室を戴き數千年の大平和を維持し來れる日本を渴仰するに至つたならば世界の平和は永久に持續せらるゝでありませう。然らば此の際日本人は如何なる考を以て世界に處すべきであらうか。これが爲には先第一に日本人は日本人の他には出來得ない天職ありと自覺せなければなりません。次にまた我々日本民族は果して如斯大なる理想を懷き得るかを考なければなりません。

先づ吾々人類の守るべき徳目の種々ある中に、國民が國家を擁護し、堅實なる基礎の上にこれを置かんが爲には、其の根本となるべきものは君父に對する道德的觀念であるので、とりも直さず忠孝の二字であると思ひます。吾々は生きてゐる目的から考へて、眼鼻口は何の爲に存在するかと云ふに、眼は眼自身の爲、鼻は鼻自身の爲に存在するのではなく、人の生存を全うする爲に存在してゐるのであります。それ故に不得已場合に於てこの全體の存在を全うする爲には、一部を破壊しても吾々は厭はないのであります。決してこの五官の慾を全うするのが最終の目的ではありません。國家に就ても之と同じく、政治家、軍人、實業家、教育家等色々あるけれども、何れも國家存在の目的に貢獻せんが爲に存在するの

である。之が爲には決して各機能が各自の幸福を催進し且これを尊重するを以て、最高の目的とする事は出来ません。必ずや、我等日本人は、皆同一に日本帝國の安寧の爲め、存在の爲に働くのが最高の道徳でなければならぬ。故に日本國家存在の目的に向つて貢獻することは最高最貴の國民道徳であらうと思ひます。吾人の身體もそれ自身として尊いのではなく、御奉公の爲御預かり申上たものとして、而も大なる事業をなし得るものとして尊いのであります。又日本人は果してかゝる大なる目的の爲に盡し得る國民なりやと云ふに、日本人に就ては興味深き特色があります。日本人は元來模倣性に富んだ國民であります。乍去凡そ事によらず模倣が根本である。學校でも要するに常に模倣によつて立べきもので、世間萬事獨創と云ふ事は殆どありません。如何なる人も多く模倣すればするほど偉大なる人格となるのであります。然るに日本は最初朝鮮文明に心酔し、後、儒教佛教に心酔し如此して我國の文明を拵へ上たのでつまり皆外國のものを攝取したのであります、而して現今は又西洋の文明を取り入れるのに汲々としてをります。古來の偉人が其人格を拵へ上げる爲には、一年でも長く色々の事を學修し而して後最後に天下の師となるのであります。今世界の各國を見るに、互に他の國の文明を攝取して居りますが、日本の如く他國の文明を尊敬し之に没頭し心酔し、之を取り入れる事に熱心なる國は稀であります。物事は何でも心酔するほどでなければ眞に發達するものではありません。多くの人に就て弟子となり蓋與を極むるものは最後の師匠であります。吾々は日本人のこの融合性を益發揮し、東西文明を融合し茲に

一大文明を建てこれによつて東西文明の統一を圖らなければなりません。開闢以來常に諸外國の文明を吸收し未だ一度も師匠とならざりし我日本は、世界の文明を攝取し盡し茲に世界の師として儼立するに至るであらうと思ひます。朝鮮文明を融化してこれを凌駕し支那及印度の文明を容れて兩ながらこれを醇化したる我日本國民はやがて西洋文明を吸收し盡し、東人も及び難く西人も望み難き底の大文明を建立し、終に東西文明の統一を成し遂ぐるであらうと思ふのである。

其の他日本人には種々の特色があります。日本人の慈悲心に富み殘刻の所業を嫌ふのは、他國に比類なきことであります。敵を愛すると云ふ事は道德思想の最高點に達しなければ成し難きことで、この邊の眞意は國民性の自ら然らしむる處とは云へ、又佛教思想の最高點を説明する法華經が助成したる影響であると思ひます。法華經の提婆達多品に、釋迦は其の敵たる提婆を善知識と稱せられ終に作佛するを得せしめられたと同じ様に、足利尊氏は叛臣には違ひないが、世の中に忠義を鼓吹する爲に生れた芝居舞臺の敵役者と見れば、別に憎むべきではありません。かゝる不忠の臣があつて忠義の思想が益盛となるのであります。其所行は惡むべきも其人は氣の毒な役割に中つた氣の毒な人である。故に世の中の惡行も皆世道人心を整ふる爲の働きであつて、吾人を善に導く善知識なりと觀すべきであります。更に今一層進んだ思想は法華經の常不輕菩薩で、路傍の人も自分を罵る人も乃至自分を棒で打つ人も皆悉く禮拜せられたと思ひます。その理由はかゝる惡人でも悉く皆佛性を備へてゐるから、其の肉體は假令如

何なるものでも、此の佛性に對して敬禮するのであると云はれました。如此思想はどうしても日本道德の根柢より生すべき機縁を有するので將來益廣く外國人と接しこれを感化すべき日本人は神ながらの道に胚胎し、右の如き思想に培養せられつゝ向上する特有の美點を發揮し、外國人も吾人と同じく後來我すめらぎの御稜威の下に大幸福を享くべき機縁を有するものとし如何に蒙昧なる土人でも蠻族でも、皆等く之を愛せねばなりません。支那人も獨逸人も決して敵視すべきでなく、悉く我皇に子來すべき機縁あると思ひ我等の同胞として見るべきであります。以上は我國民の心懸くべき思想上の大問題に相違ありませぬが、更に大切なるは忠を本とする主義であります、此思想より察するときは仁義禮智信は何れも忠を離れて存在するものではありません。此の事を常に心懸け、單に狭い國家のみを見ず、廣く人類の先導者としての天職ある大日本なりとの見地より凡てを解釋して進まなければなりません。決して忠孝の二字を以て外來のものとなす如き謬見に陥てはなりません。若し忠孝が日本にないとしたならば、忠孝なる二字を採用する理由はありません。神代には不忠なものも不孝なるものもなかつたのであります。支那の忠の字も全く日本で云ふ意味の忠ではありません。支那は孝が根本で、西洋は夫婦關係が基となり日本は家長即父と同じ意味の君主に對する忠が其の根本をなしてゐるので忠孝一致の觀念を生ずるのであります。私は此等の日本特色を充分に發揮したならば、完全に吾人の天職を盡す事が出來ると信じますかくして先帝陛下の良藥を服して偉大なる國民となり得ると思ふのであります。(完)

維摩詰言、從癡有愛則我病

生以一切衆生病是故我病

若一切生衆病滅則我病滅

(維摩經第五、文殊師利問疾品)